

『フェルマーの最終定理』

サイモン・シン著、青木薫訳／新潮文庫

私は工学部の教員でありながら、研究上、数学をほとんど使用しない。大学受験までは数学が得意だと勘違いしていたが、教養学部の数学で打ちのめされ、使わなくても良い分野を選択した。高校生の時に自然地理、建築、都市計画のいずれかを志したいという淡い思いがありながら決断できず、学部2年生で専門分野を決めるというモラトリアムを歓迎した上での大学進学であったのだが、最終的に、都市計画を選ぶ積極的理由はあったものの、消極的には数学をあまり使わなくて良いということもあった。しかしながら、数学に関わる話題に興味が無いわけではなく、学生時代に『国家の品格』で有名な藤原正彦が昭和50年代前半に書いた『若き数学者のアメリカ』や講談社ブルーバックス『四色問題 その誕生から解決』（一松信著）などを読んでもいた。

そんな私が、東京の書店で平積みされていた若干分厚い文庫本が気に入り、自分、積読（つんどく）でも良いつもりで購入しながら、帰りの新幹線で読み出し止められなくなったのがこの本である。文庫版には2000年に単行本での出版と書かれていたが、天佑を得て5年遅れではあるものの良書を手にした喜びに浸った。

17世紀フランスの数学者ピエール・ド・フェルマーが「 n が3以上のとき、ある n 乗数を二つの n 乗数の和で表すことは不可能である。」とある本の余白に書き、さらに「この定理に関して、私は真に驚くべき証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる」と書き添えた。この書き込みの予想は、誰も証明することも反例をあげることもできず、「フェルマーの最終定理」と呼ばれるようになり、プロ・アマチュアを問わず無数の数学者がその証明に挑んだのだが、イギリスの数学者アンドリュー・ワイルズが1994年に最終的な証明を完成させる。そこまでのドラマチックな話を、彼が証明する過程だけでなく、3世紀に及ぶ数学者達の苦闘も含めて描いたノンフィクションである。「ここで終わりにしたいと思います」とは1993年6月の証明に関する講演の最後の一言であるが、その後、証明の欠陥が浮かび上がり、一年余りかけてその修正を施しているのである。BBC放送のドキュメンタリーを下地に、サイエンス・ライターである著者が書いたものであり、著者も訳者も理学博士でありながら、一般人にもそれなりに判るように書かれている。また、読み進むうちに、この証明の骨格にも関わる「谷村=志村予想」「岩

澤理論」を始めとして何人もの日本人が大きな役割を果たしたことも知らされ、ワクワク感がより増幅する。昨年、ノーベル物理学賞と化学賞を日本人が受賞し、日本の科学力が脚光を浴びたが、その底力にも通じる。

数学者のことをもう少し知りたいならば：

『放浪の天才数学者エルデシュ』 ポール・ホフマン著、平石律子訳 草思社
2000年

数学に関わる小説を読みたいならば：

『博士の愛した数式』 小川洋子著 新潮社 2003年

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画・地区計画）。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『フェルマーの最終定理』 サイモン・シン著(青木薫) 新潮文庫 2006年 820円
『放浪の天才数学者エルデシュ』 ポール・ホフマン著(平石律子) 草思社
2000年 1,890円
『博士の愛した数式』 小川洋子著 新潮文庫 2005年 460円

[ブックガイド目次へ](#)